



デジタルパブリックヒストリーの 実践としての「コロナアーカイブ @関西大学」

“Corona Archive@Kansai University” as a Practice of Digital Public History

菊池 信彦
KIKUCHI Nobuhiko
関西大学



内田 慶市
UCHIDA Keiichi
関西大学



岡田 忠克
OKADA Tadakatsu
関西大学



林 武文
HAYASHI Takefumi
関西大学



藤田 高夫
FUJITA Takao
関西大学



二ノ宮 聡
NINOMIYA Satoshi
関西大学



宮川 創
MIYAGAWA So
関西大学



抄録：本稿は、筆者を含め、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（以下、KU-ORCAS）の研究者を中心とした学内の共同プロジェクトとして実施している「コロナアーカイブ@関西大学」について論じている。コロナアーカイブ@関西大学は、ユーザ参加型のコミュニティアーカイブの手法を用いて、COVID-19の流行という歴史的転換期における関西大学の関係者の記録と記憶を収集している、デジタルパブリックヒストリーの実践プロジェクトである。本稿では、パブリックヒストリーという研究動向の紹介を踏まえたうえで、世界的な動向におけるコロナアーカイブ@関西大学の位置付けやその特徴、そして収集している資料の性格等について論じる。

Abstract: This article discusses the "Corona Archive@Kansai University", a joint project by researchers at the Kansai University Open Research Center for Asian Studies (KU-ORCAS) and others. "Corona Archive@Kansai University" is a digital public history project that adopts a user-participatory community archiving method to collect records and memories of Kansai University's stakeholders at a historical turning point in the COVID-19 epidemic. This paper introduces the research field of public history and discusses the position of the "Corona Archive@Kansai University" in the global context, its characteristics, and the features of the materials it collects.

キーワード：デジタルパブリックヒストリー、コミュニティアーカイブ、デジタルヒストリー
Keywords: Digital Public History, Community Archive, Digital History

1. はじめに

本稿は、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（以下、KU-ORCAS）の研究者を中心とした関西大学内の共同プロジェクトとして実施している「コロナアーカイブ@関西大学」^[1]について論じるものである。コロナアーカイブ@関西大学は、ユーザ参加型のコミュニティアーカイブの手法を用いて、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の流行という歴

史的転換期における関西大学の関係者の記録と記憶を収集するデジタルパブリックヒストリーの実践プロジェクトである。デジタルパブリックヒストリーは、本学会誌ではなじみの薄いキーワードかもしれない。そこでまずはデジタルパブリックヒストリーの定義を踏まえた上で、世界各国で行われているコロナ関係資料のアーカイブ活動の中でのコロナアーカイブ@関西大学の位置付けやその特徴、収集している資料の性格

等について論じていきたい。

なお、本稿は、デジタルアーカイブ学会第5回研究大会に提出した同名の予稿原稿をもとに、加筆修正を加えたものである。

2. デジタルパブリックヒストリーとはなにか

デジタルパブリックヒストリーとはなにかを説明するためには、まずはパブリックヒストリーの説明から始めなければならない。

近年『パブリック・ヒストリー入門』（勉誠出版、2019）を著した編者の一人である菅によると、「パブリックヒストリーとは、専門的な歴史学者が非専門的な普通の人びと、すなわち『公衆（the public）』と交わり、その歴史や歴史の考え方に意識的、能動的に関与する研究や実践」だという。端的に言えば、パブリックヒストリーとは歴史学のオープン化であって、歴史学の実践を大学や研究機関の中だけに留めず、また、歴史学の担い手を職業歴史家だけに限定せず、そして、歴史学が伝統的に重視してきた文字資料だけでなく音声や映像等の多様なメディアを史料として扱うという特徴がある^[2]。このオープンな特徴のためにパブリックヒストリーの研究や実践は極めて多岐の領域に渡るが、なかでもデジタル技術を活用するのがデジタルパブリックヒストリーである。

パブリックヒストリーはコミュニティアーカイブとも無縁ではない。パブリックヒストリーが盛んな国の一つであるイギリスでは、1960年代後半以降のヒストリーワークショップ運動において、「下からの歴史」や民衆史を掲げ、社会における周縁的存在を歴史学の研究対象として積極的に取り上げる動きが盛んになり、これがパブリックヒストリーの成立基盤となった。この歴史学の動きと並行して、そのような社会階層やグループにあった人々自身が、自らのために自分たちの史料——それらは従来のアーカイブ機関による資料収集対象から外れていた——のアーカイブを手掛けるようになった。これがコミュニティアーカイブである。そして、90年代以降のデジタルアーカイブの進展と相まって、コミュニティアーカイブはデジタル技術を活用し、大きく飛躍することになった^[3]。したがって、パブリックヒストリーもコミュニティアーカイブもいわば同根と言える。

一方で、筆者らがコロナアーカイブ@関西大学をデジタルパブリックヒストリーの実践として位置付けているのは、「アーカイブ」という言葉が想起させる収集結果としてのコレクションだけでなく、収集過程としての歴史実践にも等しく意義を見いだしているから

である。それはつまり、将来のために史料を主体的に残すという行為を「公衆」に求めることで歴史意識の涵養を意図しているわけである。しかし、この意図は本稿執筆時点では成功しているとはおおよそ言い難い。このことは後で再び述べることにする。

3. 先行研究・事例とコロナアーカイブ@関西大学の意義

コロナ関係資料の保存プロジェクトは世界中で行われている。国際パブリックヒストリー連盟（以下、IFPH）らはその情報の集約を行っており、集まった約500件の情報をGoogle Map上で可視化している（2020年9月17日現在）^[4]。

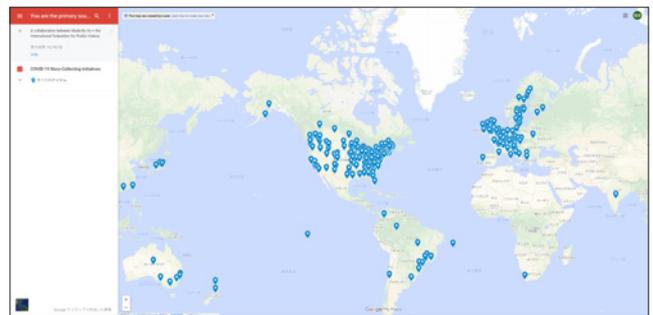


図1 Google Map

これら世界のアーカイブの動きについては本号の時実論文に譲ることとして、ここではコロナアーカイブ@関西大学の開発で参考にした2つのデジタルアーカイブプロジェクトに焦点を当てたい。

1つ目が、2020年3月26日に公開された、ドイツのハンブルク大学ら3大学共同による“coronarchiv”^[5]である。宮川も指摘するように、サイトデザイン自体は凡庸というべきだが、ドイツ外からも誰でも投稿可能であり、間口が広いのが特徴である^[6]。また、子どもや青少年を対象にした参加キャンペーンを行うなど、広報活動にも力を入れた結果、2020年9月17日現在、約3,200件もの資料が収録されている。もう一つが、2020年4月10日に公開された、ルクセンブルク大学現代史およびデジタルヒストリーセンター（C²DH）による“COVID-19 memories”^[7]である^[図2]。ルクセンブルク在住あるいはルクセンブルクで勤務する誰もが参加可能なプラットフォームである。また、投稿された「記憶」は、トップ画面上で水玉状のサムネイルで一覧表示させたり、Open Street Map上に時間経過とともに可視化させたりする等、coronarchivとは異なる高いデザイン性を備えている。公開メタデータはタイトルと内容記述、ファイルと地図上へのマッピングだけというシンプルな構成で、9月17日現在、



図2 COVID-19 memoriesトップ画面

274 件が登録されている。

以上のように、諸外国では様々なデジタルアーカイブプロジェクトが進められている一方で、IFPH らの可視化マップが示すように、国内での実施例は数点にとどまっている。特にユーザ参加によるコレクション構築は、国内では執筆時点では認められない。したがって、コロナアーカイブ@関西大学は、将来起こりうる危機的状況下における同種のプロジェクトの実践に際しては、重要な参照事例になりうるものと言えよう。

4. コロナアーカイブ@関西大学の概要とその特徴

コロナアーカイブ@関西大学 [図3] を構築するにあたって特に検討を行ったのは、次節以下の4項目である。これらを取り上げることで、コロナアーカイブ@関西大学の概要と特徴を明らかにしたい。

4.1 ユーザ参加型の採用と投稿資格

コロナ関係資料の収集方法を考えた当初は、非常事態宣言下で #StayHome が叫ばれていたため、外出して資料を集めるということが困難であった。また、デジタルパブリックヒストリーとしてユーザの自発的な参加を意図したことから、ユーザ参加型のコミュニティーアーカイブという手法を選択した。前章で参照した2つの事例はいずれも一般市民に広く投稿資格を与えていたが、投稿数の予測が困難ななかでは管理運用が難しいと判断した。そのため、コロナアーカイブ@関西大学の投稿資格を、関西大学の関係者（留学生を含む学生、教職員、校友会会員、併設校関係者とその家族）のみとした。

4.2 システム構築と収集対象資料

コロナアーカイブ@関西大学の開発は、すでにCOVID-19 が流行している最中に行ったので、簡易かつ早急に構築できることをシステムの要件とした。この要件に合致するものとして Omeka Classic を選択し[8]、これにより約1週間という短い開発期間で公開することができた。また、参照した二事例のように、ユーザがテキストデータだけでなく、画像・音声・動画等の各種ファイルも投稿できるようにすること、投稿する情報を地図上にマッピングできるようにする必要があることから、Omeka Classic のプラグインを利用し、これらの機能を実装している。

4.3 権利処理のための規約と体制

著作権処理のために、一律、クリエイティブコモンズライセンス CC BY-NC 4.0 を付与している。これについては、投稿に際して同条件での公開に同意することを利用規約上で求めている。

また、人物が写りこむ可能性を考慮し、肖像権やプライバシー権への配慮も必要である。投稿者に対しては、人物が写っている場合にはその人物から投稿許可を得たものかどうかの確認を利用規約で求めており、投稿された写真はその許諾を得たものとして扱っている。加えて、デジタルアーカイブ学会法制度部会の「肖像権ガイドライン（案）（第3版）」[9]の実証実験に参加して、判断に迷うものに対しては、そのガイドライン（案）をもとに処理を進めた。その他、ユーザ自身も投稿データを非公開で投稿する意思表示ができるようにしている。

4.4 長期保存体制の確保

KU-ORCAS は2021年度で終了するプロジェクトであるため、収集した資料データの長期保存は、関西大学博物館および年史編纂室が担うことで合意している。

5. コロナアーカイブ@関西大学による資料収集の状況

コロナアーカイブ@関西大学は、2020年4月17日に公開し、ユーザの投稿受付を開始した。対面での広報活動が憚られるなか、広報はKU-ORCASのウェブサイトおよびSNS、インフォメーションシステムと呼ばれる学内サイトで行った。しかし、9月17日現在の資料点数は62点であり、この状況は決して芳しいものとは言えない。

投稿されている資料は、ほぼすべてが写真データである。ユーザは投稿時に資料に対して1つ以上のタグ

を付与することができる。調査を行った2020年8月7日現在で81件のタグがあり、重複分を数えると全145件となり、一資料あたり2、3件のタグが付与されていることになる〔表1〕。

タグ全体を見ると、収集資料の特徴が見えてくる。タグは「コロナ対策に関するもの」、「行事に関するもの」が多く、その他に「学内・キャンパス周辺の様子」や「家族の様子」におおよそ大別することができる。これまでのコミュニティアーカイブの事例では「地域」に焦点をあてた収集が専らであった^[10]。コロナアーカイブ@関西大学は「大学コミュニティ」を対象にしていることから、国内のコミュニティアーカイブの先行事例とは性格の異なる資料群が構築されつつあると評価できる。一方で、コロナアーカイブ@関西大学の資料には、COVID-19の罹患者や医療従事者に関するものが登録されていない。後者は関西大学に医学部が存在しないためであるが、前者は、広報不足や罹患者がさほど多くはないという事実のほか、罹患者に対する差別が生じている現状を逆説的に反映した結果とも考えられる。

6. おわりに：課題と今後の展開

コロナアーカイブ@関西大学の抱える課題は多いが、とりわけ資料点数の少なさが問題であると認識している。この理由は、なにより投稿資格を関大の関係者に限定していることであり、またソーシャルディスタンスが求められている中で、パブリックヒストリーの実践として求められる「公衆」への関与が難しいということも挙げられるだろう。

この課題への対応として、現在、同じくコロナ関連資料の収集展示を手掛ける吹田市立博物館との連携を通じて、投稿資格の拡大を検討している。本号刊行時にはおおよそのイベントは終了しているはずだが、今後、全国の図書館職員等のGLAM関係者を対象にオンラインで投稿を呼び掛ける「アーカイバソン」^[11]や、各家庭に眠るスペイン・インフルエンザに関する資料を持参してもらいその場でデジタル化するイベントも企画している。これらの取り組みを進めることで、「公衆 (the public)」がパンデミックの記録と記憶をアーカイブするという行為を通じて、現在を歴史的に捉えるきっかけとなることを目指していきたい。

謝辞

本研究は、関西大学による2020年度「新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の克服に関する研究課題 (教育研究緊急支援経費)」に採択された「『コロナ

表1 コロナアーカイブ@関西大学のタグとその件数

| | | | |
|-------------|----|---------|-----|
| コロナ対策 | 13 | 体験授業 | 1 |
| 初等部 | 7 | 保育園 | 1 |
| 式典とりやめ | 7 | 入口 | 1 |
| 入学式 | 6 | 凜風館 | 1 |
| マスク | 5 | 分散登園 | 1 |
| 千里山キャンパス | 5 | 分散登校 | 1 |
| Zoom | 4 | 各自登園 | 1 |
| ハンドジェル | 4 | 図書館 | 1 |
| 卒業式 | 3 | 子ども | 1 |
| 小規模 | 3 | 学内掲示板 | 1 |
| 感染症予防 | 3 | 孫 | 1 |
| 警備 | 3 | 家庭生活 | 1 |
| 遠隔授業 | 3 | 対面授業 | 1 |
| 関大通り | 3 | 影響 | 1 |
| コロナ | 2 | 手洗い | 1 |
| ソーシャルディスタンス | 2 | 手洗い補助 | 1 |
| フェイスシールド | 2 | 折り紙 | 1 |
| 幼稚園 | 2 | 持ち帰り | 1 |
| 戻りつつある日常 | 2 | 授業再開 | 1 |
| 教室 | 2 | 掲示板 | 1 |
| 教育後援会 | 2 | 教員研修 | 1 |
| 桜 | 2 | 新しい生活様式 | 1 |
| 検温 | 2 | 木 | 1 |
| Bilibili | 1 | 生協 | 1 |
| iPad | 1 | 研究者 | 1 |
| JR | 1 | 祖父 | 1 |
| VR | 1 | 第4学舎 | 1 |
| Youtube | 1 | 給食再開 | 1 |
| イベント | 1 | 習慣 | 1 |
| ウェブサイト | 1 | 英語 | 1 |
| オフィス | 1 | 英語保育 | 1 |
| おままごと | 1 | 講義動画 | 1 |
| オンライン | 1 | 身体測定 | 1 |
| キャンパス | 1 | 追跡 | 1 |
| キャンプ場 | 1 | 通常保育 | 1 |
| コロナ禍での家族の交流 | 1 | 鉄道 | 1 |
| スタバ | 1 | 関西大学初等部 | 1 |
| セブンイレブン | 1 | 集団登園 | 1 |
| ラーメン店 | 1 | 飛沫防止パネル | 1 |
| ランチ | 1 | 駅 | 1 |
| 会議室 | 1 | 計 | 145 |

アーカイブ@関西大学』を核とした新型コロナウイルス感染症およびスペイン風邪の記録と記憶の収集発信プロジェクト」の研究成果の一部である。

註・参考文献

- [1] コロナアーカイブ@関西大学.
<https://www.annex.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/s/covid19archive/page/covidmemory> (参照 2020-09-17).
- [2] 菅豊. パブリック・ヒストリーとはなにか?. 菅豊, 北條勝貴編著. パブリック・ヒストリー入門: 開かれた歴史学への挑戦. 勉誠出版. 2019. pp.3-68.

- [3] Simon Popple, Daniel H. Mutibwa and Andrew Prescott. "Community archives and the creation of living knowledge". Simon Popple, Andrew Prescott and Daniel Mutibwa ed. *Communities, Archives and New Collaborative Practices (Connected Communities)*. Policy Press. Kindle版. 2020.
- [4] "Mapping Public History Projects about COVID 19". IFPH. <https://ifph.hypotheses.org/3225> (参照 2020-09-17).
- [5] coronarchiv. <https://coronarchiv.geschichte.uni-hamburg.de/projector/s/coronarchiv/page/willkommen> (参照 2020-09-01).
- [6] 宮川創. ドイツにおけるデジタル・パブリック・ヒストリーとしてのコロナ・アーカイブの発展. *人文情報学月報*. 2020年6月30日, (107).
- [7] COVID-19 memories. <https://covidmemory.lu/> (参照 2020-09-17).
- [8] Omeka Classic. <https://omeka.org/classic/> (参照 2020-09-17).
なお、coronarchivやCOVID-19 memoriesは同じシリーズのOmeka Sを利用している。
- [9] 肖像権ガイドライン(案)(第3版). デジタルアーカイブ学会. <http://digitalarchivejapan.org/bukai/legal/shozoken-guideline> (参照 2020-09-17).
- [10] 例えば以下がある。
佐藤知久, 甲斐賢治, 北野央. *コミュニティ・アーカイブをつくろう！ーせんだいメディアテーク「3がつ11にちをわすれないためにセンター」奮闘記*. 晶文社. 2018.
真鍋陸太郎, 水越伸, 宮田雅子, 田中克明, 溝尻真也, 栗原大介. *参加型コミュニティ・アーカイブのデザイン：デジタル・ストーリーテリングや参加型まちづくりの融合*. デジタルアーカイブ学会誌. 2020, vol. 4, no. 2, p.113-116.
中村覚, 宮本隆史, 片桐由希子. *コミュニティ・アーカイブの方法論の構築に向けて：千代田区におけるデジタルアーカイブ・ワークショップの事例より*. デジタルアーカイブ学会誌. 2020, vol. 4, no. 2, p.109-112.
- [11] Wikipediaのエディットソンに倣い、「アーカイブ」と「マラソン」で作った造語である。

